心身障害学研究　Bull. Spec. Educ.
14(1)：53—60，1989

精神遅滞幼児の母子遊び場面における相互交渉の分析

細川かおり*　　橋本　創一**　　池田由紀江***

本研究は，MA3歳の精神遅滞幼児の母子のコミュニケーションスタイルを分析することを目的とした。母子の遊具を用いての自由遊び場面を分析した結果，先行研究で指摘されているように，母親のコミュニケーションスタイルは指示的であった。この理由として，子どもからの働きかけが貧弱であること，子どもが応答的でないこと，また，母親が教育的であることが考えられた。また，相互交渉は母親が主導的であった。しかし，対象児の中でMAの高いものは子ども主導型に変わりつつあり，そうしたMAの高い対象児は相互交渉も長く行っていた。また，各母親は子どもの言語，行動特徴によって調節したコミュニケーション行動を用いていた。

キーワード：精神遅滞幼児　　母子相互交渉

Ⅰ．問題と目的

母親の言葉は子どもの言語発達に影響を及ぼし，子どもは母親との相互交渉により子どもはコミュニケーション能力，言語能力の基礎を獲得していくと考えられている。特に精神遅滞児は前言語期が長くその後も言語発達は遅れをきたし，言語発達に多くの問題を抱えているため，乳幼児期を通して母親は重要な言語環境となる。

従来の母子相互交渉の研究では母親の特異な言語パターンが子どもの言語発達に一部影響するのではないかという観点から，前言語期を中心におよそ3歳児までが主な研究対象となっており，それ以上の年齢の子どもを対象にした研究はほとんど見あたらない。しかし，精神遅滞児の場合，言葉の出現時のみならず，2語文，3語文出現以降も言語環境として，また，相互交渉の最も身近な相手として母親は重要であると考えられる。よって，本研究では健常児では母親とほぼ対等に相互交渉を行えるとされる（藤崎，1982）MA3歳の精神遅滞幼児とその母親を対象に母子のコミュニケーションスタイルを分析することを目的とする。

＊　筑波大学心身障害学研究科
＊＊　東京都立矢口養護学校
＊＊＊　心身障害学系

従来の研究では，精神遅滞児に対する母親のコミュニケーションスタイルの特徴として，健常児の母親に比べて子どもに対してより指示的，主導的であり，子どもの行動をコントロールしがちであることが指摘されている（Buium, N., et. al., 1974; Cunningham, C. E., et. al., 1981; Eheart, B. K., 1982）。母親が指示的であるという特徴は，子どもが加齢するに従い減っていくのかという点に関して，Maurer, H.（1987）は，ダウン症児を12ケ月時から36ケ月時まで縦断的に研究した結果，母親の「指示」は加齢と共に減っていくことを指摘しているが一方，Davis, H.（1988），Mahoney, G.（1988）は母親の指示は特に減らないことを指摘しており，3歳児までを対象に検討したこれらの研究では一致をみていない。

母親は子どもに合わせてスピーチを調節していくことが指摘されているが（Cunningham, C. E., et. al., 1981），精神遅滞児の母親のこのような特異なコミュニケーションスタイルの理由として，精神遅滞児が受身的であり，健常児に比べて母親に応答し損なうことが多いことが指摘されている（Buium, N., et. al., 1974; Eheart, 1982; Maurer, H., 1987）。また，Mahoney, G.（1988），Davis, H.（1980），Gutman, A.J.（1979）は母親のコミュニケーションスタイルに及ぼす子ども側の要因とし

て，子どもの言語レベルを指摘しており，Davis, H. (1980), Gutman, A.J. (1979)は言語レベルをマッチングさせた統制群と比較した結果，精神遅滞児の母親は指示的でなかったとしている。

以上の知見を参考に本研究では以下の点に関して検討する。

1）母親のコミュニケーションスタイルは，言語をコミュニケーションの手段として用いることが可能になってきた遅滞児に対しては，指示的ではないのかを検討する。

2）子どものコミュニケーションスタイルは，全体のコミュニケーションの内，言語を用いたコミュニケーションが多くの比重を占めるかを検討する。

3）母親のコミュニケーションスタイルに影響を及ぼす子どもの要因として，子どもの言語レベルがあげられているが（Mahoney, G., 1988; Davis, H., 1980; Gutman, A.J., 1979），この他にも，子どもの個人差の点から母親のコミュニケーションスタイルに及ぼす要因について検討する。

4）子どもが主導的に遊びを展開し，また言語による相互交渉が可能と考えられる本研究の対象児は相互交渉を長く続けることができると考えられるが，この点について検討する。

II．研究方法

1．対象者

CA4～6歳の精神遅滞幼児とその母親6組を対象とした。全員家庭養育児であり，Early Stimulation Program（筑波大学池田研究室）に参加した者たちであった。対象児の内訳はTable 1に示した。対象児らの言語，行動特徴は以下の通りである。

Sub. 1は，二語文を話すことができるが，日常的には物の名称を独り言で言ったり，単語レベルでコミュニケーションを行う。母親への依存が強く，模倣的な行為，遊びが多い。日常場面では，消極的な態度が目だつことが多い。Sub. 2は，二語文を使って周りの人と会話ができる。助詞の使用は余りみられないが，助詞を誤まって使うことが時々ある。また，構音不明瞭で聞きとれない場合がある。母親は，おっとりした性格で，比較的受容的な態度でSub. 2と接している。Sub. 3は，家庭において母親とはよく会話をするが，自宅以外や母親以外の人に対しては，全く発話がなくなる。親近的な場面であれば，聞き取りにくい小さな発声による一語文程度の独り言がみられる。また，コミュニケーションの手段は発声をあまり伴わないジェスチャーで意志を伝えたり説明したりする。母親もおとなしい性格であるため，家庭以外では親子での会話が少ない。Sub. 4は，二語文を話すことができるが，普段は一語文で周りの人と会話する。「なんで？」「どうして？」などの疑問による働きかけが多くみられる。また，助詞は主格の「は」と「が」を使用することができる。Sub. 5は，二語文を話すことができ，要求語が多い。構音不明瞭で聞き取れない場合もあるが，積極的に周りの人に話しかけることが多い。遊びは，自分本位に展開することが多い。母親は教育的な意識が高く，積極的にSub. 5に接している。Sub. 6は，はっきりとした発語はないが，発声により母親や周りの人に意志を伝達したりする。言語による指示の理解はできる。行動特徴として，注意の転導性が大きく，そのためか行動に一貫性がみられない。こちらからの強いコントロールによって，課題遂行ができたり，コミュニケーションも成立する。そうしたSub. 6の特徴から，母親の常に指

Table 1 対象児のプロフィール

単位；歳：月

	性	CA	MA	津守式；言語領域	表出言語レベル
Sub. 1 ★	男	4：2	2：10	3：0	二語文
Sub. 2 ★	女	4：8	3：1	3：0	二語文
Sub. 3 ★	男	4：10	2：8	3：0	一語文
Sub. 4 ★	女	5：2	3：1	3：8	三語文
Sub. 5 ★	男	5：4	3：4	4：6	三語文
Sub. 6	女	6：4	2：0	3：0	指示的発声

注）★ ダウン症

MAは1987年版田研・田中ビネー知能検査による

示的な態度が目だつ。

2．観察状況

筑波大学心身障害系プレイルーム内にて，各対象母子に対して15分間の自由遊び場面を設定し，この間の母子行動をVTR録画した。母親に対しては，日常の家庭場面で行っているように自然に接することを求めた。また，以下の遊具，教具7点を共通に母子に提示し，自由に使用するよう求めた。

提示遊具，教具；　①ままごとセット（フォーク，ナイフ，カップ，皿など）　②顔型のはめ板　③幾何学図形のはめ板　④円柱さし　⑤四角柱さし　⑥絵本（動物，乗り物など）　⑦輪投げ

3．分析方法

VTR録画資料から，母子の発声，発話，動作をすべて記録用紙に転写した。次に，母子相互のコミュニケーション行動のカテゴリー分析，相互交渉の分析（Turn-Taking）の2点から分析を行った。手続きは，それぞれ以下に示す通りである。

1）コミュニケーション行動のカテゴリー分析

母子それぞれのコミュニケーション行動を，Mahoney, G.（1988）による分類を参考にして作成したカテゴリー（Table 2）に配した。ここでは，母親の働きかけを機能的カテゴリーに分類し，子どものコミュニケーション行動については交渉に用いられた行動様式に分類した。

2）相互交渉型の分析（Turn-Takingの分析）

母子それぞれの発話及び動作において，相手への働きかけ，あるいは応答行動と思われる箇所で交渉の成立したものをその行動連鎖の長さによって区分した。その定義は以下の通りである。

①相互交渉Ⅰ；一方から他方への働きかけと，それに対する相手の応答によって終結するもの。つまり，連鎖が1つのもの（例えば，子「お茶どうぞ」→母「はい，いただきます」の場合）。②相互交渉Ⅱ；連鎖が2つ続いたもの。③相互交渉Ⅲ；連鎖が3つ以上続いたもの。

また，それ以外の母子それぞれの発話及び動作において，一方からの働きかけは明確であるがそれに対する相手の反応が生起しない場合を交渉不成立（無視）と区分した。そして，それら以外の交渉に無関係な発話（独り言等）や行動については，その他として区分した。さらに，これらの交渉型について母子いずれによって開始（Initiation)されたものかについても区分した。

Ⅲ．結果と考察

1．コミュニケーション行動の分析

母子双方の発話数とコミュニケーション行動の頻度を示したものがTable 3である。そして，コミュニケーション行動の頻度を各対象母・子ごとに分類し割合でFig. 1—Fig. 5に示した。以下，母親の行動と子どもの行動についてそれぞれ述べ

Table 2　コミュニケーション行動カテゴリー

母　親　の　行　動	子　ど　も　の　行　動
○子どもへのコミュニケーション行動	○コミュニケーション行動のモダリティ
要求・懇願（動作を要求するもの）	音声によるもの
要求・懇願（言語を要求するもの）	非音声によるもの
情報を要求	その他
情報を与える	
ラベルづけ	
注意を向けさせる	○母親からのコミュニケーションに対する行動
動機を与える	ことばでの受け答え
禁止	行動による受け答え
	注意を向ける
○子どもからのコミュニケーションに対する行動	無視
ことばでの受け答え	
注意を向ける（うなずき，単なる返事等）	
無視	

Table 3 母子の全発話数及びコミュニケーション行動頻度

	全発話数		相手への働きかけ		相手からの応答行動	
	子	母	子	母	子	母
Sub. 1	32	137	34	113	39	26
Sub. 2	53	105	42	86	44	19
Sub. 3	2	75	6	120	12	6
Sub. 4	99	177	93	126	51	51
Sub. 5	329	205	227	151	102	54
Sub. 6	28	149	56	120	23	20

ていくこととする。

1）母親のコミュニケーション行動

6組の母親の子どもへのコミュニケーション行動の平均をFig. 1に示した。8つのカテゴリーのうち，「情報を与える」が最も多く24.7%を占めており，「要求・懇願（動作を要求するもの）」16.9%，「情報を要求」14.7%，「動機を与える」14.5%と続いている。それに対して，最も少なかったカテゴリーは「禁止」であった。「情報を与える」というコミュニケーション行動が多かったことは，遊び場面で使用した道具が課題的要素の高い教具であったために，子どもがその教具を使いこなすための援助が必要な場面であったからと考えられる。また，「禁止」が少ないというのは，子どもの行動を抑圧せず，認めていくという受容的で望ましい行動といえよう。

また，「要求・懇願」においては，「言語を要求するもの」より「動作を要求するもの」が顕著に多かった。言語による質問・応答よりも，動作を指示することが多いことが伺える。「要求・懇願（動作を要求するもの）」，「要求・懇願（言語を要求するもの）」，「情報を要求」といった，子どもに対して動作，言語，情報という応答を期待する要求行動は39.1%と非常に多い。つまり，母親の子どもに対するコミュニケーション行動は，子どもの反応や応答を期待していると思われる指示的な行動が中心であったといえよう。

一方，各母親のコミュニケーション行動を示したものがFig. 2である。個々にみていくと，Sub. 5の母親が他の遅滞幼児の母親とは違った傾向を示している。Sub. 5の母親は，「情報を要求」が50.3%とコミュニケーション行動の半数を占め，逆に「要求・懇願（言語を要求するもの）」という行動が全くみられなかった。先述したようにSub. 5の母親は非常に教育的であり，Sub. 5も積極的に発話するため，このように遊びの中でも学習を促すような行動が多発したものと思われる。「注意を向けさせる」行動について注目してみると，Sub. 1，Sub. 3，Sub. 6の母親に多くみられ，その他のSub. 2，Sub. 4，Sub. 5の母親は比較的少ない。Sub. 1，Sub. 3，Sub. 6の3名はMAが低く，日常的にも反応や応答行動が乏しい者たちであった。

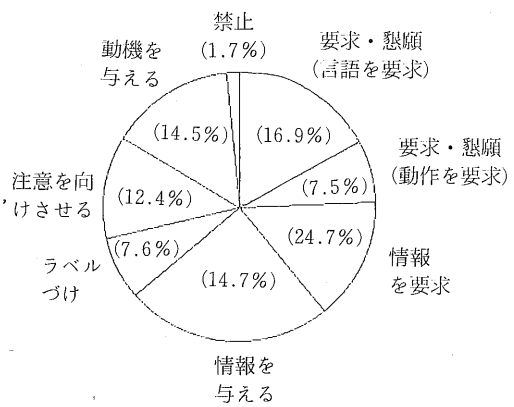

Fig. 1 母親の子どもに対するコミュニケーション行動

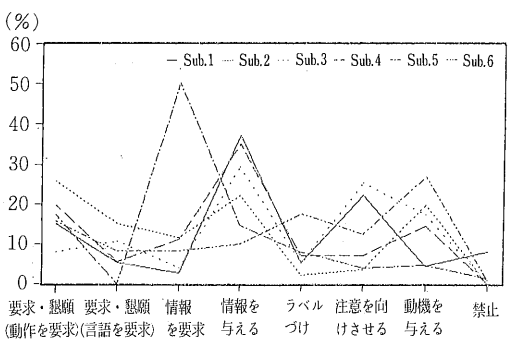

Fig. 2 各母親のコミュニケーション行動

また，Sub. 3とSub. 6の母親には，「動機を与える」という行動も多くみられた。自主性の少ないSub. 3と注意の転導があり行動に一貫性のみられないSub. 6の行動特徴に即した母親の行動と受け取れる。つまり，子どもの行動に即して母親がコミュニケーションを調節しているといえよう。

次に，子どもからのコミュニケーションに対する行動をFig. 3に示した。Sub. 2，Sub. 4，Sub. 5，Sub. 6の母親では，「ことばによる受け答え」が顕著に多く観察された。それに対してSub. 1の母親は「ことばによる受け答え」よりも「注意を向ける」行動の方が多かった。また，Sub. 3の母親は，「無視」が多いが，これはSub. 3の母親に対する働きかけそのものが少なく，また非常にわかりづらいコミュニケーション行動であったためにこうした結果がみられた。Sub. 3以外の5名の母親には，子どもからのコミュニケーションに対する行動のうち，「無視」という反応はほとんどみられなかった。

以上の結果から，母親のコミュニケーションスタイルには指示的な行動が多くみられ，そのことは子どもの応答行動によって調節されたものであったと考えられる。

2）子ども（遅滞幼児）のコミュニケーション行動

子どもによるコミュニケーション行動のモダリティをFig. 4に示した。Sub. 3以外は，「音声」による行動が「非音声」よりも多く観察された。中には，Sub. 5やSub. 6のように「音声」，「非音声」がほぼ同数に出現している対象児もいるが，コミュニケーションは「音声」行動がやや優位であるといえるであろう。それに対して，Sub. 3は母親に対するコミュニケーション行動の頻度が6であり，その内訳は「音声」2，「非音声」4であった。これは，他の対象児と比較して極端に少数であり，「非音声」行動が優位というよりも，母親に対しての働きかけの貧弱さが問題であろうと考えられる。

次に，母親からのコミュニケーションに対する行動をFig. 5に示した。母親からのコミュニケーションに対する応答の仕方は，対象児によってまちまちであった。Sub. 5は「行動による受け答え」よりも「ことばでの受け答え」が顕著に多くみられた。これは，Sub. 5の発話数が329，母親の発話数が205と非常に多いことからも，Sub. 5と母親は主に「ことば」を用いた様式によってコミュニケーションを成立させていることがわかる。そして，Sub. 2とSub. 4は，応答のパターンとして「ことばによる受け答え」と「行動による受け答え」をほぼ同数の割合で用いていた。また，Sub. 3は「行動による受け答え」で，Sub. 6は「ことばでの受

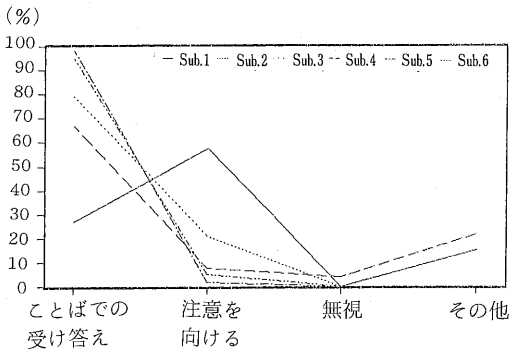

Fig. 3 子どもからのコミュニケーションに対する母親の応答

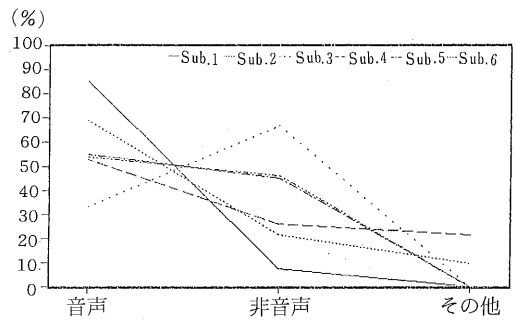

Fig. 4 子どものコミュニケーション行動のモダリティ

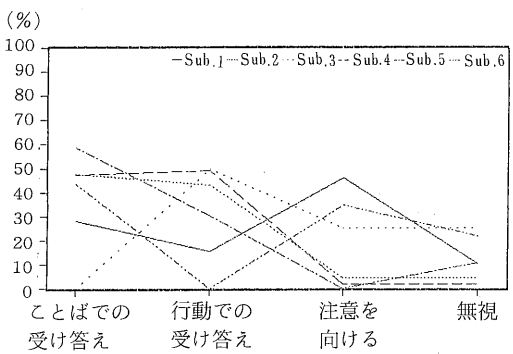

Fig. 5 母親からのコミュニケーションに対する子どもの応答

け答え」を中心に母親に対して応答していた。これは，発話の極端に少ないSub. 3と行動に規則性や一貫性のみられないSub. 6による応答パターンと解釈できよう。「注意を向ける」という応答行動が多くみられたSub. 1は，母親の場合も子どもからのコミュニケーションに対する行動として「注意を向ける」という応答行動を多用している。この親子の応答のパターンの一致は，音声言語をあまり用いないコミュニケーションスタイルが成立していると受け取れよう。

2．相互交渉型の分析

母親のInitiationによる各相互交渉型の出現頻度をFig. 6に示した。各交渉型の出現頻度は，相互交渉Ⅰが平均9.2，相互交渉Ⅱが平均8.8，相互交渉Ⅲが平均5.2，無視が平均40.7，その他が2.8であった。注目すべきは，無視が非常に多いという点である。交渉成立（相互交渉Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ）が平均23.2であるのに対して，交渉不成立（無視）はその2倍近い頻度であったことになる。母親が子どもに対して働きかけた行動は6割近くが，子どもによって応答されなかったことになる。

子どものInitiationによる各相互交渉型の出現頻度をFig. 7に示した。各交渉型の出現頻度は，相互交渉Ⅰが平均9.6，相互交渉Ⅱが平均2.0，相互交渉Ⅲが平均6.3，無視が平均2.8，その他が3.0であった。母親のInitiationによる場合とは異なり，無視の頻度が少ない。また，交渉成立の平均頻度は18.0であり，交渉不成立の2.8よりも多くみられた。これは，子どもの働きかけに対して，母親が非常に応答的に対応したためであろう。また，相互交渉Ⅱが相互交渉Ⅰ，Ⅲと比較して少ない。これは，母親に対して遅滞幼児らが働きかけを行い，母親はそれに応答するがその次の遅滞幼児らの応答がなく交渉がそこで途切れてしまうといった現象であろう。つまり，子どもが応答的でさえあれば，交渉の連鎖の数も増加していくといえよう。

交渉の成立については，母子のInitiationによる違いは認められなかった。交渉不成立については，遅滞幼児のInitiationの場合より母親のInitiationの方が非常に多かった。これは，遅滞幼児らがあまり応答的でないといえ，同時に母親のInitiationによる働きかけが過剰気味であったためであろうと考えられる。

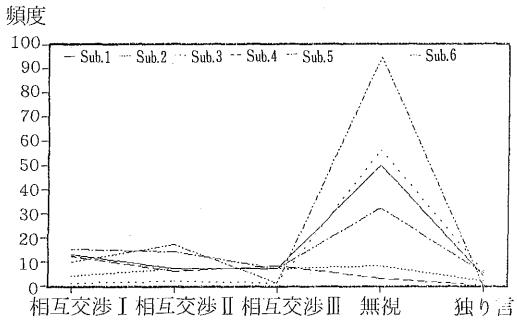

Fig. 6 母親のInitiationによる相互交渉系列

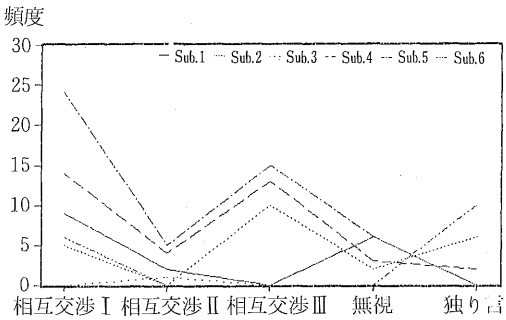

Fig. 7 子どものInitiationによる相互交渉系列

Ⅳ．まとめ

本研究の結果，母親は指示的であり，Cunningham, C.E. et. al. (1981) Eheart, B.K. (1982)の知見を支持する結果となった。母親らは，個々の子どもの言語・行動特徴に即してコミュニケーション行動を調節しており，母親が指示的である理由としては，子どもからの働きかけが貧弱であること，子供が応答的ではないことがあげられた。これらは先行研究（Buium, N., et. al., 1974; Cunningham, C.E., et. al., 1981; Eheart, B.K., 1982）と一致する結果であった。また，母親が教育的であることが考えられた。母親が指示的であることについて，Maurer, H. (1987)は指示的であることは教育的ではないとは一概にはいえないとしている。特に遅滞幼児の場合働きかけが少なく，どうしても母親が，指示的になってしまうことが考えられるし，またそのような環境が自分からの働きかけが少ない遅滞幼児の言語環境としては適切なものとも考えられよう。しかし，本研究の結果，母親のInitiationによる相互交渉の内，「無視」が多かったことは考慮すべきである。これは，本研究の対象

児らは早期教育を受けている者たちであったために，母親からの働きかけは過剰気味であったとも考えられよう。また，子どもからの働きかけが少ない以上，母親は多く働きかける必要があると考えられるが，単に働きかけを量的に多くするのみではなく，子どもの言語レベルや発達に即した働きかけや，遅滞幼児が応答しやすい働きかけを考えていく必要があるのではないだろうか。

健常児では36ケ月児は親と対等に遊べることが指摘されているが(藤崎，1982)，本研究の対象児はおよそMA36ケ月，CAは4歳以上であるにもかかわらず母親が主導的であった。しかし，対象児の中で比較的MAの高い者たちは，子ども主導型に変わりつつあるような結果が得られている。また，長い相互交渉を行っていた対象児や，コミュニケーション手段として言語を多く用いていた対象児はいずれもMAの高い者であり，遊び場面で言葉を積極的に用いようとする姿勢のみられた者たちであった。本研究の結果から子ども主導型の，長い相互交渉を行うためにはMAが関係することが推察される。しかし，同MAの健常児に比べ相互交渉の成立が遅れているのか，それとも健常児とは異なった相互交渉のスタイルを示すのかは今後検討していく必要があろう。

付　記

本研究をすすめるに当たり，西沢勝則，江連真帆子，前津貴子，蔭山美穂，熊谷恵子，井上善之，西野敦子（筑波大学教育研究科）諸氏にご協力を頂きました。記してお礼申し上げます。

文　献

1）Buium, N., et. al. (1974): Early materal linguistic enviorment of normal and Down's syndrome language-learning children. American Journal of Mental Deficiency, 79, 52-58.

2）Cunningham, C.E., et. al. (1981): Behavioral and linguistic development in the interactions of normal and retarded children with their mothers. Child Development, 52, 62-70.

3）Davis, H. & Oliver, B. (1980): A comparison of aspects of the maternal speech inviorment of retarded and no retaded children. Child, Care, Health and Development, 6, 135-145.

4）Davis, H., Stround A. & Green, L. (1988): Maternal language enviroment of children with mental retadation. American Journal of Mental Retardation, 93 (2), 144-153.

5）Eheart, B.K. (1982): Mother-child interactions with nonretarded and mentally retaded preschoolers. American Journal of Mental Deficiency, 87 (1), 20-25.

6）藤崎真知代(1982)：36カ月時の母子相互交渉における働きかけ・応答の分析．教育心理学研究，30(3)，250-256.

7）Gutman, A.J. & Rondal, J.A. (1979): Verbal operants in mother's speech to nonretarded and Down syndrome children matched for linguistic level. American Journal of Mental Deficiency, 83, 446-452.

8）本郷一夫，布施佐代子，鈴木牧夫(1987)：保育所における乳児の相互作用に関する縦断的研究―行動カテゴリーと相互作用系列からの分析―．「東北心理学研究」，(2)，1―10.

9）松尾久枝，加藤孝正(1989)：重度精神遅滞児の母子相互交渉場面におけるMaternal Speech―前言語期の健常児との比較―。特殊教育学研究，27(1)，11―20.

10）Maurer, H., et al (1987): Context of directives given to young children with Down syndrome and no reterded chileren: Deveropment over two yeras. America Journal of Mental Deficiency, 91, 579-590.

11）Mahoney, G. (1988): Maternal communication style with mentally retarded children. American Journal of Mental Retardation, 92 (4), 352-359.

Summary

Mother-Child Interaction with Mentally Retarded Infants on Free Play Setting

Kaori Hosokawa, Souiti Hashimoto and Yukie Ikeda

The purpose of the study was to analyze mother-child interaction with mentally retarded infants during free play setting. Subjects were six mother-child dyads. The MA of the retarded infants were about three years. Results indecated that maternal communication style was directive. Mentally retarded infants were less responsive and less initiation of interaction. Mother was more dominant but higher MA infants became dominant and their long interaction sequence increased.

Key word: infants with mental retardation　　mother-child interaction